日本大学通信教育部校友会

東京都支部

大江戸通信

自主創造

東京都支部校友会／広報委員会編集部　連絡先：080-5032-1467　発行責任者：金子栄輔
本部校友会事務局：東京都千代田区九段南 4-8-28　Tel/Fax：03-3234-5858　編集責任者：髙木典章

特別対談

関通信教育部長 大いに語る

入るは易く出るは難(かた)し”の通信教育部育部

聞き手　本誌編集部　富澤良光・金子栄輔

いま、世の中は第４次産業革命と言われています。自動車の世界では自動運転がその視野に入ってきており、インターネットによってあらゆるものが繋がるＩｏＴの時代も目前に迫ってきています。

大学における教育の方法も変化してきています。昨年４月に通信教育部の部長として就任された関通信教育部長をお迎えして、先生のプロフィールとともに通信教育部の現在・未来についてお話を伺いました。

もくじ

●対談（関部長）……1
●会費納入者のご紹介……4
●東京都支部総会・決算・予算資料……4
●暑中お見舞い申上げます……6～7
●東京都支部だより……8
●通信教育部・全国総会開催……8
●関東ブロック総会・千葉県大会開催案内……8
●編集後記……8

――最初に先生のプロフィールをお伺いします――

「栃木県で生まれましたが、生後２カ月で東京文京区の護国寺にある大塚５丁目の実家に移り、そこで育ちました。地元の小学校を卒業して中学からは護国寺の隣にある日本大学付属豊山中学校に進学し、豊山高校を卒業しました。その後、日本大学法学部を卒業し、日本大学大学院修士課程を修了しました。大学院を修了した際に、一部上場の会社に入社が決まりましたので、恩師の石川才顕先生にご報告に伺ったところ『君はサラリーマンより弁護士などの法律実務家の方が性格に合っている。会社の方は断って勉強を続けなさい』との強いお言葉をいただきました。父も同じ意見でしたので、大学院修了後に司法試験を受験することにしました。その後、司法試験に合格し弁護士の資格を取りましたところ、今度は、石川先生から『研究者の道を進み、自分のあとを継いで欲しい。縁だと思って引き受けなさい』との言葉を頂きました。しかし、私は、修士論文を書いた時に大変な思いをして書きあげた経験があったので、正直に『研究者の道は自信がない』と申し上げたのですが、先生には『それは誰でも同じだ。やってい

くうちに身に付くものだ』と言われて、先生の強い勧めもあって研究者の道を選択しました。その後、法学部専任講師、助教授から教授を経て、昨年(平成 29 年 4 月)通信教育部長の辞令を受けて現在に至ってます」

「今から考えてみますと、人生が大きく変わるのは小さなきっかけからであった気がします。人との出会いであったり、一つの言葉であったり、人生のターニングポイントにおいて、いくつかの選択肢の中から、どれを選ぶかによって人生の流れが大きく変わることを実感しています。石川先生の勧めで研究者の道に入ったのも、先生の一言から『この道で頑張ろう』という気持になったからです。いま振り返ってみますと、研究者の生活は自分の性格に合っていたと思っており、先生には感謝しています」

――ご家族とご趣味は？――

「家族は妻と子供二人で、大学生の息子と高校生の娘です。趣味はバラを育てることで、約 40 種類のバラを育てて、家内と一緒に楽しんでいます。少しずつバラやブドウの木が育っていくのが楽しみです。私には、外で活動するよりも机に向かって研究論文を少しずつ書いていく生活の方が性格に合っていると思っています。食の嗜好は 40 歳を過ぎたあたりから肉よりも魚の方を好むようになりました。外国留学の時にドイツに居ましたので、ワインが好きになりました。住んでいた町は、トリアーというルクセンブルグ近くの国境の町で大変住みやすい所でした。トリアーはモーゼルワインの有名な生産地で、古くから糖度が高いブドウで甘口のドイツワインを生産しています。現地で、ドイツ語を話す楽しさを覚えました」

――お好きな言葉は――

「あまり構えているわけではありませんが、一つのことを貫く『一意専心』を目指しています。気を散らさずに一つのことに集中して、物事に取組んでいく方が合っています」

――学問には何が必要と考えますか――

「論文等で示す結論は、意外と自分の価値観が反映している気がします。学問にはある種の価値観をしっかり持つことが必要だと思います。また、学者としてはニュートラルであるよりは『社会はこうあるべきだ』という自分の立ち位置をしっかり定めて考えることが必要だと思います。私の専門の法律学は、結論が条文の解釈を通して固定しがちです。これではいけないという視点がないと新しい提言をすることができない。大きく言えば自分の研究なり、勉強していることを原点として、社会の何に役立つかということを考えるべきでしょう。そのためには『社会のあるべき姿は、こうあるべきだ』ということを考えていく必要があると思います」

――法学部を目指したきっかけは？――

「私が卒業した日大豊山高校には、文系と理系のコースがあり、私は後者を選択していました。理系コースを選択した者は、理工学部、医学部、歯学部を目指すものが多くいました。私は、たまたま高校 3 年生の時に弁護士の先生の特別講演を聞いて、自分も法律家を目指そうと思い『司法試験に挑戦しよう』と思い法学部を選択しました。その後、日本大学の法学部の教授となりましたが、法学部の教員となった当初から通信教育部で講義し、教科書も執筆しています。今から考えれば通信教育部の部長として着任することに縁があったと感じています」

――通学生と通信生の気質の違いは――

「日本大学には、16 の通学部とその他に通信教育部があります。両者は学生を教育して学士の資格を授けるという目的は同じですが、学修方法が違います。通学部の学生は校舎に通って講義を受けるのに対し、通信教育部の学生はリポートの提出などを通して遠隔教育を受けています。かつては働かずに勉学に集中するのが通学生で、働きながら学ぶのが二部学生と通信教育部学生というイメージがありましたが、今は多少違ったものとなっています。通学部の学生も入学と同時にアルバイトに励むことを多く見受けられるからです」

「通信教育については、郵便を利用したリポート添削などのイメージが強く、画一的で一方通行のイメージがあったといえます。しかし、インターネットが活用される時代に入りましたので、これからの通信教育

は最新の通信技術を活用して、多様性をもった時代の要請に合致した教育方法に進化していくと思っています。通信教育部としましては、これらの技術を駆使した学修効果のある教材を開発していくつもりです」

「昨年赴任してみますと、通信教育部は、昼間スクーリングに多くの若い学生が通学しており、通学課程と変わらない若々しさを感じました。部長として着任するまでは、通信の学生は苦学生というイメージでしたが、現在では通学課程と通信教育課程の学生には大きな差がないと感じています。市ヶ谷校舎の雰囲気も通学課程と似てきていると感じています」

「通信教育部の学生の学力のレベルはあくまでも本人の意欲次第ですが、一部の学生は大変優れており、全体的には通学課程の学生との間に大きな差は感じられないというのが実感です」

――学修支援について――

「日本の大学は『入るのは難しく、出るのは易しい』と言われていますが、通信教育部に限って言いますと『入るのは易しく、出るのは難しい』というのが現実です。勉強方法の検討や基礎知識が不足している学生もいます。それらの学生に勉学を継続させて卒業してもらうために教職員は共に頑張っています。毎年、軽井沢の研修所で入学後のオリエンテーションを開催するなどして学生のやる気を引出しています。また、市ヶ谷校舎の１階に『学修支援センター』を設けて、学修方法等の相談を受ける機会を設けて学生のやる気の維持と向上に努めています。通信教育部には専任教員が１２名おりますので、先生方が相談にのったりして、限られたマンパワーの中ですが、脱落してしまう学生数を減らし、学生が卒業できるように努力しています」

「最近では、インターネットを通して教員と学生との密着度を高める工夫と試みをしています。通信教育だけに手取り足取りというわけにはいかないのですが、卒業式の後の懇親会に参加してみると、教員と学生との関係も大変良好であることを感じました。専任の先生がいるというのは素晴らしいことだと思っています」

――社会の大学に対する要求の変化と教育方法の変化――

「現実に社会が要求している内容を授業に取り入れ、新しい視点を反映した授業内容を目指したカリキュラムの改訂に力を入れています。現在の社会の要求、情報化時代に適合した教材の見直しを常に図っています。テキスト教材も 10 年前と今とではかなり違ってきていて、図表が増えたり多色刷りの印刷でビジュアルに見せる工夫もしています。また、およそ 80 講座の授業をメディアで行っています。メディア授業は、先生方が作った教材をインターネットによって送信し、双方向でやり取りする授業です。通信教育部では、場所と時間の隔たりをなくして、メディア授業だけでも単位が取れる上限を増やしています」

「メディア授業は『いつでも、どこでも、誰にでも』学修できる学修方法であり、大学の授業をフルタイムで受講し、あるいは通学する余裕のない人達にとって大きな可能性をもった授業です。通信教育部では、メディア授業とこれまでの印刷教材による授業や対面授業との組合せにより教育効果の向上を目指していて、その学修効果のあり方について検証もしています。例えば、インターネットを通じた在宅学習では、学生が良く理解できるようにパソコンを通しても文字がはっきり読み取れるように黒板の文字も大きく書いて分かり易くなるようにしています。更にＦＤ専門委員会を定期的に開いて、どのようにしたらメディア授業が効果的になるかを日頃から研究しています。通信教育には特性がありますが、教材と自宅の学習だけでは弱く、そこをどのように補うかが課題とされてきましたが、スクーリング等の対面授業に加え、メディア授業が通信教育のこれからのあり方の一つとなってきています。通信教育部では、日本大学におけるメディア授業の先駆的な役割を果たしていきたいと思っています。いろいろ課題もありますが、私たちはメディアを使う教育方法では他学部より先行しています。通信教育で競合する他大学に対しも絶えず一歩先をいくことができる努力をしていくつもりです」

「現在の社会は、大きな変革期を迎えています。そこで、通信教育部を構成している法学部、文理学部、経済学部、商学部を横断した領域の異なる教育内容を総合させることで、新しい教育を実施できる余地もあると思っています」

――大学での交流と地方在住学生のサポート――

「本学の学長は『電子機器が発達しても基本は人間との接触だからコミュニケーションを大切にしてほしい』と言われています。通信教育部の学修においても、多角的論点と質問に対する回答とか、その場で意見を発表しディベート力を学生にどのように身につけ